

（この話はフィクションであり、実在の団体、催し、人物等には全く関係ありません。もし、似通った描写や固有名詞が出てきた場合は、全て偶然の一致であります）

「しかし、SF大会に来るのも久しぶりだよな」

「そうだね。私は二十年以上は来ていないな」

「ぼくは十年ぐらい前に来たのが最後だ」

「すごい熱気だねえ」

「昔も今もSFファンの情熱というのは変わらないな。若い人たちが空想科学小説を支持しているのを見ると、気持ちが高ぶってくるよ」

「おいおい、空想科学小説だなんて古めかしい言い方をしなさんな。せめてサイエンスフィクションと言えよ」

「その呼称だけどね、近頃はサイファイなんていう言い方もあるらしい」

「おじさんがよく使っらしいね。サイファイおじさんって」

「いまひとつ切れが悪い駄洒落だな」

「久々だからな。——見てっらん、コスプレショーだ。うーん、若い子の張りのある肌を見るのはいいねえ。回春になるよ」

「おじんくさいことを言うな。でも、どのコスプレも皆目何なのかわからないな。最近のテレビマンガかな」

「また古めかしいことを。アニメと言いなさい、アニメと」「ニャロメー！」

「帰るよ、私は」

「ははは。いいよ、帰っても。ぼくは一人でもこの大会を満喫するぞ」

「冗談だよ。久しぶりのSF大会だ。たとえ連れ戻しに来たって帰るもんか」

「来るかな……連れ戻しに」

「制限までに戻らなかったらな」

「おおっ、あの変なコスプレはなんだろうな。二頭身で頭に烏帽子を載せた子供が勺を持っている」

「知らないのか。あれはおじやる丸だ。NHKでやってるアニメだよ。最近、声優が変わった」

「よく知ってるなあ」

「うちのあたりじゃ、時々電波が入るんだ」

「あのかっこいいおねえちゃん是谁のコスプレだろう。サイボーグ003かな」

「馬鹿言え。あれがエヴァの綾波だよ」

「エヴァ？ エヴァ・ブラウンか？ ヒトラーの愛人だったという……」

「そんなもののコスプレしてどうするんだ。ああ、あっちにはレンズマンがいるぞ」

「あの変なオウムは？」

「『タイムボカン』のペラスケだ」

「あのセーラー服を着た猿は？」

「『猿の惑星・制服』だろうな」

「あの沖縄風のかっこうをした恐竜は？」

「『ジュラさん』じゃないか？」

「楽しいなあ。あれ？ あそこで流れてるのはNHK少年ドラマシリーズの『時を駆ける少女』じゃないか」

「ほほっ、懐かしいなあ。あのときは、私の原作も使われたっけ」

「あの作品は私も好きだったよ。復刻してほしいもんだ」
 「それにしても、若いファンが我々が書いた古いものを、古くさがらずに今でも楽しんでくれているのはうれしいじゃないか」

「当然だよ。SFはきのう今日生まれたジャンルじゃない。」

「ウェルズやヴェルヌからはじまる長い伝統の中に我々も、そして彼らもいるんだ。私たちだって、古いガーンズバックの『ラルフ……』やドック・スミスの『スカイライク』、バロウズの『火星シリーズ』なんかを面白がって読んだじゃないか」
 「それもそうだな。お、会議室でパネルディスカッションをやってるぞ。出席者は……小松左京、柴野拓美、豊田有恒、石川喬司、森優……すごいメンバーだな」

「彼らに会うのも久しぶりだ。ちょっとのぞいていくか」

「それよりも、こっちの『ゲゲボドリリンクの部屋』というのほづが興味深いな」

「私はやめておくよ。身体に悪そうだな」

「さすがに21世紀はじめての大会ということで、外国人も多いな」

「そうだな。おい、あそこに座って談笑しているのは、あいつじゃないか?」

「あいつ?」

「ほれほれ……歳をとるとど忘れしていかんな、『銀河帝国のなんとか』を書いた……」

「『銀河帝国の弘法も筆の誤り』か?」

「そんな情けないタイトルじゃなかった。『銀河帝国の興亡』だ」

「ああ、じゃああの……」

「その隣にいるのは、ほら、あの『人形がなんとか』というのを書いた……」

「我孫子武丸かね」

「ちがうちがう。思い出した、『人形つかい』を書いた……」

「いつこく堂かね」

「ちがうちがう」

「すつげえ人数だなー。俺、今まで何度もSF大会のスタッフやってきたけど、こんなに人が多い大会はじめてだよ」

「さすが2001年の記念大会ね。規模がちがうわ。それにしても、外国の人が多いわね」

「SFは国際的だからね。親日家の作家もけっこういるし、最近ではソウヤーとか、古くはジュディス・メルルとか……」
「なにそれ。証券会社？」

「ちがうよ。年間SFベストっていうものがあって……」

「悪いけど、あたし、あんたみたいなオタクじゃないの。古い話されてもわかんないのよね」

「そ、そんなに古くないぞ」

「いるのよねー、あんたみたいな。SFマガジンを何歳から定期購読してたとか、小学何年生のときに『バベル17』を読んだとか自慢気に言うやつが」

「う、うるさいな。それにしてもちよつと人、多すぎないかい。こんなに混雑するわけないんだけどな。何だか予定人数の1.5倍ぐらいはもう入場しているみたい……」

「そんなはずないわよ。だって、ちゃんとチケット持ってきた人以外入れてないんでしょ」

「いや……それが……」

「どーしたのよ。だめじゃないの、そんなの。受け付け失格だわ」

「それがその……年輩の人が顔パスで通っていくんだ」

「いくら年輩だって、きちんと『チケットお持ちですか』って

きけばいいのよ。それがあんたの仕事でしょ」

「それが……言えないんだよ。顔見たら、何だか言葉が出なくて。何ていかうその……チケットなんか必要ない、この人はどうしても入場させるべきだって思ってしまうんだ」

「何言ってるのよ、馬鹿。次はあたしが受け付けするから、あんた、そこで見てなさいよ」

「……………」

「あ、いらっしやいませ。チケットはお持ちですか」

「ノウ。アイ・ドント」

「それでしたら当日券をお買い求めいただくか……………あの……あの……………」

「サンキュー」

「あああ……………行っちゃった……………。ねえ、あんたの言ったとおりだわ。どうしてだかわからないけど、『この人は入れてあげなきゃ』って思っちゃったわ。ねえ……………どうしてそんな青い顔してるの?」

「今のお婆さん……………ジュディス・メルルじゃ……………」

「へえー、そうなんだ。でも、親日家なんですよ。S F大会に来てもおかしくないじゃん」

「亡くなったんだよ、メルルは」

「じゃあ他人の空似……………」

「いや、絶対ジュディス・メルルだ。インターネットで死亡記事を見たとき、添えてあった写真と瓜二つだった」

「まさか……………」

「オープニングアニメを見逃したのは痛かったな。DAICON一派が仕切るときは、あれが呼び物の一つなんだ」

「そんなにおもしろいのかい」

「らしいね。以前のものは『幻のDAICONフィルム』と

してマニアの間でダビングされて出回っているらしい」

「それを言うなら、例のほら、君の一周忌のときのイベントのアニメ。あれはすごかった」

『ホシヅルの日』かい？ ぼくもあつちで見たよ。『おーい、でてこーい』の朗読とスライドの合体がいい効果を生んだね」

「ハロー、フォークス。えーと、ミスター……」

「ホシです」

「ミツセです」

「オウ、歳をとると名前がすぐに出てこなくなつてね。ソーリー、ソーリー。私のことは覚えていますか」

「もちろんです、メルルさん。今日は、どうして日本のコンベンションに？」

「21世紀最初の日本SF大会ということで、スタッフがとても張り切っていておもしろくなりそうだと、ミスター・ドイルにきいたのよ」

「彼は霊界通信の大家だから、こっちの情報にも詳しいんだ」
「だから、あつちのSF関係者はみーんな来てるわ。こんな時期にやってくれるなんて、招待されたも同然でしょ」

「そりゃそうだよな。なにしろお盆だから」

「あ、あそこにアシモフとハインラインとハミルトンが、ジョン・キャンベル・Jrと話してるわ。へーい、アイザック！」

「ジョン・キャンベルの隣にいるのは誰だい」

「あれはたしかヒューゴー・ガーンズバックよ」

「会つのははじめてだよ」

「キャンベルに紹介してもらいましょうよ。さあ、行きましょう」
「走っていっちゃったよ。——やっぱり来てよかったな。今年の大会はまだまだ盛り上がりそうだ」

「3001年には、また来ような」